



生まれつき不治の病の女の子が、入退院を繰り返しながらも五歳になりました。あらゆる治療を試みましたが、その甲斐もなく、とうとう、安らかに死を迎えさせるターミナルケアの病院施設に入院することになりました。

「もう何でも好きなものを食べさせてあげてください」という医師の言葉に、お父さんは涙をこらえて、娘に「何が食べたい？」と聞きました。小さな声で、「おとうさん、ブドウが食べたい」と女の子は言いました。しかし季節は冬、ブドウは季節外れで何処にも売っていません。それでも思いつく限りの八百屋さん、果物屋さんをくまなく探し歩きましたが、やはり、冬にブドウはありませんでした。最後に、あるデパートを訪ねました。「あのう、ぶどうはありませんか？」と祈るような気持ちで、お父さんは尋ねました。「はい、ございます」と答えが返ってきて、お父さんは、ホッとしました。そして案内された売り場には木箱に詰められた見事なぶどうが置かれてありました。

しかし、あまりに高価な値段にお父さんは立ちすくんでしまいました。入退院の繰り返しで、もう手元には、ほとんどお金がありませんでした。悩んだ末に、お父さんは必死の思いで店員さんに頼みました。「一粒でもいい、二粒でもいいので、分けていただけませんか」お父さんからすべての事情を聞いた店員さんは、箱からぶどうを取り出すと、数粒のぶどうを丁寧にもぎとり、小さな箱に入れて、綺麗に包装して差し出しました。「どうぞ、二千円でございます」

お父さんは、支払いを済ませて、すぐに数粒のぶどうを持って病院に戻りました。そして娘に食べさせてあげました。女の子は、痩せた手で、一粒のぶどうを口に入れ、「おとうさん、おいしいね。ほんとにおいしいね！ほんとうにおいしいね！」と、そして、そのぶどうを食べきらないまま、女の子は微笑みながら、静かに息を引き取りました……

出典（高島屋デパートの店員さんと患者の女の子のお父さんの実話だそうです。この文章はとても有名で高島屋では、研修によく使われています）